

## 特集：卒業

## 生命環境学群学生表彰を受賞して —徒然なる感想—

阿部 貴晃（筑波大学 生物学類 4年）

「発生学は好きですか？」というのは自分が本学の入学試験のときに聞かれた言葉だ。その問いに対して「いいえ、好きではありません」と答えたお馬鹿さんが自分である。その時のお馬鹿さんが、コウモリの Evo-Devo の研究で表彰を受けることになるのだから、人生何が起こるかほんとに分からない。

発生学をこよなく愛している訳でもなかった自分が何故コウモリの Evo-Devo をやったのか、そこには特に深い理由がありそうだ、と思われるかもしれないが、そんなことはない。単純に自分は形態学がやりたかったのである。

生き物の形態は面白い。それぞれの生きざまに対して合目的的に特殊化したその形はどれも、心惹かれる。自分は当初、生き物の中でも特に脊椎動物の機能形態に興味があった。そして、卒業研究では形態学をやってみたいとぼんやり思っていた。しかし、生物学類で授業を受けていて、脊椎動物の形態学をやっている先生は心当たりがなかった。「筑波では脊椎動物の筋と骨と血にまみれた形態学はないよなあ」と思いつつ、生物学類のホームページを眺めていたら、見つけたのは「比較発生形態学」の七文字。これはやるしかない、そう即決したのは研究室希望調査の一週間前、ギリギリのタイミングで和田研の門を叩き、土岐田先生に弟子入りした。弟子入りの際、土岐田先生に「形態のできかたを知るのも面白いよ。」と言われたのが、今でも強く印象に残っている。土岐田先生のその言葉は強烈で、生き物の生きざまを決める形態がどのように出来上がるのか、知りたいと思った。これがコウモリ研究と自分のなれそめである。

ただ、そこからの一年間は、色々苦勞した。なにせ自分は発生学に関して、だめだめ学生だったからである。Hox すらよくわかっていなかったし、ましてや、Pax, Fgf, Tbx なんてその名前すら知っていなかった。発生学(どれかは言えないが)の単位すら落としている。そんな勇者のパーティに加わるどころか、序盤にでてくる雑魚キャラにすらやられてしまうような市民 A にすぎない自分が、卒業研究という小ボスを無事に倒すことができたのは、土岐田先生だけでなく和田研と八畑研の方々の愛と論理にあふれたご助言とご指導のおかげだ。

単純な知識だけでなく、研究に対する姿勢、実験の考え方、科学の楽しみ方、多くのことを学ばせていただいた。特に発生学のなんたるかの一端を学べた、というのは一番の収穫だ。形態のできかたは確かに面白かった。

自分はコウモリとマウスの胎児をそれぞれあつかったが、咽頭胚になったばかりのマウスとコウモリの胎児はほんとに区別がつかない。しかし、それが成長するにつれてマウスはマウスらしく、コウモリはコウモリらしくなっていく。マウスの前肢もコウモリの前肢も同じ前肢としてできるけれど、発生のある時期で、コウモリの前肢は急速に成長する。コウモリの飛膜は小さな萌芽からでき、それが、体中に拡張することで形成される。コウモリ

の機能形態である、翼という構造のダイナミックな形成過程は、座学の発生学では決して得ることのできない興奮を自分にくれた。

百聞は一見にしかずとはよくいうけれど、まさにそうで、今まで百聞して好きでなかったものが、一見でいとも簡単に覆った。発生学はなんと面白い学問だったのか、それを二十二歳にしてようやく気がついた。それを気づかせてくれたこの一年は、かけがえのない一年だ。

人間、食わず嫌いはよくないもので、実際に食べてみたらおいしいものは世の中にたくさんある。自分の発生学がそうであるし、他にも自分が苦手意識を持っているものはおいしいものは多くあるのだろう。おいしいものを食べるために今後も自分は色々なものを食べていこうと思っている。最初は自分の好きなものと一緒に食べることが意外とコツなのかもしれない。あと、思い切りも大切だろう。ウジウジ悩むのだったら覚悟を決めて、食べてしまわないと冷めてしまう。食べ物には暖かいうちが一番おいしいのである。

以上が自分のこの一年の結果である表彰に対する感想だ。卒業という特集にふさわしいかは分からないけれど、自分のこの一年の思いの丈を綴らせていただいた。このような場を設けてくださったつくば生物ジャーナル編集委員の方々、ありがとうございます。また、卒業研究を遂行するに当たって公私ともに多くの方々に支えていただきました。この場を借りて密かに深く御礼申し上げます。

Communicated by Takeo Hama, Received April 21, 2012.